同窓会だより

発　行
千葉県立船橋高等学校同窓会
千葉県船橋市東船橋6-1-1
〒273-0002 TEL047-422-2188
印刷 ㈱ サ ラ ト
姫路市北条宮の町172番地
TEL 0792-84-1380

題字／小原天簫先生

母校はいま

第一回オーストラリア短期留学報告

本校では、オーストラリアのビクトリア州、モーニングトンにあるカトリックの私立校Padua Collegeに、七月二十日(火)から八月四日(水)まで十四日間にわたる初めての短期留学(ホームステイ)を行いました。参加した第二学年の男子六名、女子十九名は、温かい出迎えを受けた後、約一週間Padua校の生徒宅にホームステイをしながら、英語授業、授業参加、文化交流会、社会見学といった貴重な体験をしました。

成田空港で勢ぞろい

この短期留学は次の三つの目的に沿って行われました。

一、ホームステイをして、オーストラリアの家庭生活や学校生活を体験する。

二、オーストラリアで、実際に様々な機会で英語を使ってコミュニケーションをとる。

三、オーストラリアの文化・歴史・自然を理解する。

また、この短期留学のため、一月より十五回以上にわたるオリエンテーションが行われ、プログラム内容の説明、ホームステイの注意、役割分担、文化発表準備、英語指導などがありました。

〈日程〉

二一日(水)メルボルンからバスでPadua校到着。

二二日(木)Gippslandという野外博物館でオーストラリアの石炭を中心とした町を見学。

二三日(金)歓迎式典参加、英語授業開始。

二四日(土)二五日(日)ホストファミリーと自由行動。

二六日(月)Healesville Sanctuary(自然を生かした、オーストラリアの動物のテーマパーク)を見学。

二七日(火)二八日(水)八年生及び九年生と八つのテーマ(教育、交通、休日、家族、結婚、食べ物、ファッション、祭)で両校の生徒が、英語で二〇分、自国の文化紹介。

二九日(木)メルボルン見学。

三〇日(金)最後の英語授業とさよならパーティ。

三一日(土)八月一日(日)ホストファミリーとの最後の週末。

二日(月)ホストファミリーと別れ、シドニー見学。

三日(火)シドニー見学。

〈短期留学を振り返って〉

今回の短期留学は大成功でした。歓迎式典やさよならパーティでの船橋高校の生徒のスピーチや歌は、Padua校の先生や生徒、ホストファミリーから賞賛を浴びました。また、今回のハイライトである文化交流会での発表は、準備の甲斐あって見事な出来栄えでした。

Padua校での歓迎式典

反省点としては、オーストラリアの気候(冬)に対する準備不足から体調を崩す生徒がいたこと、相手校との連絡が不十分で、予定を変更したことが挙げられます。これらの反省点は、今後のプログラムに生かしていきたいと思います。

この短期留学で生徒は、将来への大きな財産となる様々な体験をしたと思います。参加した生徒が今回育まれた友情を今後も一層深め、日本とオーストラリアの架け橋になってくれるよう願っています。

寄稿　三上正弘教諭

研学

同窓会会長
三代川　幹雄
（昭和二十三年卒）

我が県立船橋高等学校が、今を溯る大正九年設立の産声をあげてから八十年の歳月が、流れました。人生で言えば、「傘寿」を迎えることになります。県下に数多い高等学校の中にあって、文武両道の誉高い、母校の悠揚八十年の系譜と同窓生の輝かしい足跡を改めて思い、感慨無量です。

この八十年という記念すべき節目にあたり、なつかしい同窓会だよりを開いてみると、改めて、同窓会だよりの中に先生方の一貫した信念、「研学」の精神が脈々と流れていることに心を打たれました。

ピラミッドは頂上からは造れません。何もない砂漠の中に最初に石を置いた先人の汗を忘れる訳にはいきません。時代が激しく揺れ動く今、この先輩方が残してくれた「研学」の精神こそを無形の宝として、我々同窓生が守り育てていかなければならないとの思いを新たにいたしました。

船高同窓生は、平和と康慶な次世紀を念じ、大いなる夢に向け、絶え間なく、努力を重ねていこうではありませんか。

船高生に期待すること

全日制教頭
天谷　正夫
（平成十一年着任）

私は、小・中学校時代を津田沼で過ごした。通学していたのは習志野一中で、当時は津田沼駅南口の千葉工業大学の隣にあった。私が高校受験の年に薬園台高校と習志野高校（初代校長は本校の第三代校長山口久太氏）が開校した。

友人の何人かが本校に進学したこともあり、本校には何となく親しみを覚えていた。私はその後、佐倉市に転居したので津田沼・船橋の町とも疎遠になってしまった。しかし、野球部の顧問として一、二度本校に練習試合でお邪魔したことがあった。当時は高橋修監督で、野球場は右翼が狭く窪地にあったことが印象的であった。

船高生気質については未知であったが、野球部の公式戦の戦いぶりからおおよそ察することができた。船高生は他校の選手に比べて体力的には非力であるが、気力と集中力で数少ない好機を逃さず得点し、実力的に数段上の学校を倒す場面を何回か目にしていたからである。私はこの船高生気質は全ての船高生に通じるものだと思う。先日、野球部は予選で市船高を破り、秋季県大会に出場し、専大松戸高校に六回まで八対〇と先制されながら七回から猛反撃に転じ、大逆転で奇跡の勝利を挙げた。その後も、流経大柏高に対し八対〇、東海大望洋高に対し逆転で八対三といずれも大勝し準々決勝に進出したが、次の市立習志野高に対し〇対二と惜敗した。ここまで勝ち進んだ勝因は部員の不屈の精神力によるところが大であったが、わざわざ応援に駆けつけてこられた三代川会長を初め、同窓生・保護者の方々の声援なしでは考えられない。

一方、本校の生徒は生活面で問題なしとは言えない。生徒の登校時、裏門で遅刻指導に当たることがあるが、遅刻をしても平然と歩いてくる生徒を必ず目にする。理由を聞くと悪気もなく「寝坊」と返事が返ってくる。挨拶も生徒のほうからしてくるケースは少ない。中には挨拶をしても無視して通り過ぎる生徒も見受けられる。また、校舎内もお世辞にもよく清掃されているとは言えない。

これから社会に出て、各方面でリーダー的立場で活躍するであろう船高生の将来を思うとき、本校の生徒に求められるのは、総合的な学力と共に豊かな人間性。

私は真に尊敬に値する人とは自己の生活を犠牲にしてまでも人類の福祉と幸福に貢献できる人物であると思う。私が船高生に期待することは大学受験を通過した後、自己の生きるべき道に懸命の努力をすると共に恵まれない人々に温かい救いの手を差し伸べる気持ちを持ち、行動に移してもらいたいということである。

二万五千人の叡智を誇りに

校長
小西　紀男
（平成九年着任）

本校は平成十二年をもって創立八十周年を迎えます。

この慶賀の年を迎えるに当たっては、同窓会役員の皆様を中心に記念の式典や事業の実施について準備を進めてくださっています。

ご苦労に衷心より感謝申し上げます。

さて、学校と致しましては、目下、以下のような学習環境の整備を期待しています。

高等学校における部活動が衰退傾向にある中で本校の部活動はますます盛んです。そこでこの良き伝統を引き続き発展させるために部活動の施設・設備の更なる充実と不足している楽器や放送機器の購入などが望まれています。

また、情報化や国際化社会に対応して、コンピュータなど情報機器の整備を行うとともに、国際交流を円滑に進めるための基金の創設等も望まれます。

さらに、二十一世紀を目前にして、未来の船橋高校のあるべき姿を大規模な調査を実施して、把握したいなどの希望もあります。

同窓の皆様には出費多端な折誠に恐縮ではありますが、この機にこうした願いのいくつかでも実現に近づけて頂ければ幸いです。

さて、船橋高校の八十年の歩みは、およそ二万五千人余の卒業生を世に送り出しました。「専心研学」「自他敬愛」の校風を胸に母校を巣立ち、威風堂々と時代を生きる多くの同窓の皆様方のますますのご活躍を願わずにはおれません。

二万五千人の勇気と英知は計り知れない大きな力となって、世界に貢献していることを誇りに思います。近づく八十周年を心から祝福申し上げたいと思います。

平成十一年度　陸上競技大会

「春の同窓会」で新たな出会いを！

実行委員長
松　永　修　己（昭和三十三年卒）

毎年二月十一日建国記念日は、創立八十年の歴史を刻む我が母校の春の同窓会です。

例年、幹事学年が中心となって、先輩、後輩、同級生、そして先生方にも呼びかけて世代を超えた卒業生が一堂に会します。

平成十一年も三〇〇人以上の同窓生が、楽しいひと時を過ごしました。

そして、平成十二年は、昭和三十三年卒の第十回卒業生である我々が幹事学年となり、実行委員会を組織し、準備にとりかかっております。

特に、西暦二〇〇〇年を迎え、母校の創立八十周年の節目の年でもあり、春の同窓会で、記念事業や行事なども報告されると思いますし、例年よりも多くの同窓生、先生にお集まり願い、母校の記念すべき年をお祝いできれば、と思っております。

年に一度の同窓会、今年は会場を船橋のホテル・サンガーデンに移し、八十年の歴史を重ねた母校に思いを馳せ、旧交を温め、また、新たな出会いを通して、楽しい、有意義な同窓会を演出したいと思っております。

是非、同級生、先輩、後輩に呼びかけて、皆さんお誘い合わせてのご参加をお待ち申し上げます。

船高の歴史・補遺（六）

「第二運動場の由来」

市立習志野高校教諭
小　川　信　雄
（昭和三十八年卒）

現在、船高の校舎東側には細い道路を隔てて、地面を四メートル前後、長方形に掘り下げたグランド「運河跡」がある。このグランドは主に野球場とサッカーグランドとして使用されているが、一九八六（昭和六十一）年までは、建設省（旧内務省）所管の国有地であった。船高の敷地、県有地となる以前は、戦後のいつ頃からかは、判明していないが、国からの借地であった（多分、三代山口久太校長の一九四八―五二年在任中に借地し、グランドとして使用していたのではないかと思う）。

この土地が県有地、船高の敷地になったのは十一代荒井昭雄校長時代で、校舎敷地整備の一環として、国有地を買収できたものであった。その時、周辺の土地所有者とは境界の確定をめぐってトラブルもあった。例えば、グランド北側の成田街道脇（現在、バス停のある周辺）は、その対面にある自動車整備工場の故障車などの置き場になっていて、また猫の額にもならぬ畑もあり、工場側は使用権を主張したようである。

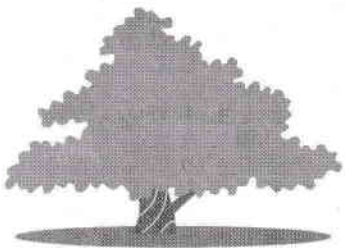
しかし、用務員であった横尾庫氏（一九五六―八八年在職）の証言で、その土地は契約も結んでおらず、一時的に自動車を置くことを認めていたにすぎないことが判明し、問題が解決した。私などは学校財産に関する契約、書類の管理などの、あまりのいい加減さに、当時あきれた思いをした。

さて船高のグランドの由来はどのようなものであるかを戦前の『東京日々新聞　房総版』に探ってみた。その記事によれば、このグランドは一九四〇（昭和十五）年四月から工事を開始した「利根放水路計画用地」の一部工事跡地がそのままの形状で、現在に残されたものである。

一九三九（昭和一四）年に内務省は、利根川から東京湾を結ぶ「利根放水路計画」（本線二五キロ）を確定、告示して用地買収が始まった。水路は取手・湖北・布佐・手賀・船穂・白井・豊富・八木ヶ谷・二和・鎌ヶ谷・金杉・花輪（つまり船高の東側）・東京湾へつながり、千トン級の船も航行可能な運河ともする予定であった。船高グランドの西側崖上には大きな工事事務所が建てられた（私の在学中にはあった木造の建物）。事業は一五年計画によって、利根川の三分の一の水量を取手から東京湾へ落とそうというものであった。

一九三〇年代、「昭和恐慌」のため、県財政は苦しかったが、内務官僚出身の岡田文秀知事（三二―三四年）の千葉県開発構想のもとで東京首都圏に組み込まれた千葉県域の社会資本整備（港湾・道路・用水等）が始められた。さらに内務省は四〇年六月に「利根放水路計画」を組み込んだ「東京湾臨海工業地帯計画」を立案し、発表している。

この計画は養老川河口から江戸川放水路までの湾岸を埋立して、工業地帯を造成しようというものであった。戦争で中断された、この計画はかたちを変えて戦後、京葉工業地帯として実現した。つまり、「利根放水路計画」は戦争の激化によって中止されたまま、その一部工事跡地が船高のグランドになったのである。だからグランドは下総台地を掘り下げたままの不思議な形状をしているのである。



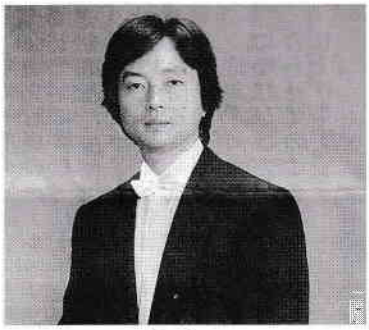
わが同窓

夢を追いつづけて

指揮者　田久保　裕一
（昭和五十一年卒）

プロ野球の監督と、オーケストラの指揮者は一度はやってみたい職業だとよく言われるが、実はだれでも指揮者になれるのだ。指揮者は特定の免許など要らないし、音楽大学を出ていなくとも、音楽家を名乗ることができる仕事なのだ。読者の皆様も明日から「私は指揮者だ」と表明すれば、なれるのである。ただ、「なれる」と「できる」は大違い。重要なのは世間が、また他の音楽家が、自分のことを「指揮者」と認めてくれてはじめて成り立つのである。プロの指揮者を夢見て、十二年間の教員生活に終止符を打ってから、早七年が過ぎてしまった。

三十の時に母の死に直面し、人生のはかなさを痛感してから五年の間、これからの自分の人生を考えた。一度しかない人生だから、自分の好きな音楽を極めたい。それには教師を続けていては時間がない。教師としての重責を全うしつつ、アマチュアオーケストラを指揮していくという、それまでの生活を続けていくこともできたのだが、二兎を追うもの一兎を得ず。両方とも中途半端に、ただただ仕事をこなして行くだけの自分が見えてしまったのだ。それに指揮者としての勉強を、もっとしたいという欲求で、息ができないほど心の中は充満していた。


筆　者

思い切って妻に相談した。当時子供も一人いて、数ケ月後には二人目が生まれようとしていた我が家の状況の中で、定職を捨て、本当になれるかどうか定かではない指揮者の道を選択するということは、手こぎボートで太平洋を横断するようなものだ。果たして妻は私の決意を理解してくれるのだろうか。逃げ道ではないが、もし五年たっても指揮者として認めてもらえないようだったら、こんな仕事もできるとばかりに、ありとあらゆる職種を手帳に書き出し、妻に見せながら、思いを語ることにした。そこにはツアーコンダクター（添乗員）や特技である結婚式の司会業やビデオ撮影技師等もあったように記憶している。だが、妻はろくにそのメモを見ることもしないで、「いいんじゃないの。あなたならどんな事でもやっていけそうだから。生活力がありそうだものね。」の一言で、不安を見せる事なく賛成してくれたのだった。「私がもし反対しても、あなたはやるのでしょう？」とも。十二年間の教師生活で得た貴重な体験や人間関係が、きっと指揮者として身を立てたときに役立ってくれると確信していたので、実は私の中では不安はなく、むしろ思う存分音楽のことだけ考えることができる喜びが大きかった。

さて、私が音楽にのめり込んだのは、言うまでもなく船高時代である。小学校、中学校とオーケストラをやってきた私は、高校に入っても迷わずオーケストラ部に入部した。ここでの三年間の楽しい活動が、私の人生を決定づけた。音楽漬けの毎日で、この頃から「指揮」に目覚めたとも言える。一生の中で一番遊んだ時期、それが高校時代だったと、今になってなつかしく思えてくる。当然学業の方はおろそかになってしまったが、そんな私でも何とか大学に進学することができた。教育学部とは言え音楽科だったので、ここでも思う存分、音楽を学ぶことができた。

卒業後は迷う事なく、教職に就き、高校時代から続けている地元のアマチュアオーケストラを二つも三つも掛け持って、指揮をしたり、チェロを弾く生活が続くことになる。三十歳になろうとしたときに、東京で指揮者の国際コンクールがあるというので、度胸だめしに参加してみることにした。大学の指揮法の授業以外に、誰にも習ったことがなかったので、自己流の指揮だったが、並み居るプロの指揮者やそのたまご達に混じって、臆することもなく、思う存分指揮することができた。プロのオーケストラを初めて振ったのもこの時である。結果は三百人の応募者の中で十人というセミファイナルまで残ることができた。「これはひょっとして、ちゃんと勉強すれば、指揮者になれるかもしれない」という明るい兆しが、少しだけ見えてきた。長年の夢を追い求めてみたくなった。

教師を辞めた三十五歳のときに思ったことは「指揮者としてはまだ一年生にもなっていない、自分はまだ、大学を出たての二十三歳のような心づもりで、何でも勉強し、吸収するぞ。焦ってはだめだ。」ということだった。七年たった今、実際は四十をとうに通り越してしまったが、自分ではまだやっと三十歳くらいの感覚でいる。

指揮者という職業は、一見華やかに見えるが、実は孤独な職業だ。指揮の仕事のうち、九十パーセントが楽譜の勉強と言える。これから演奏しようとする曲のイメージを、楽譜の中から読み取る作業だ。様々な角度から、作品に迫ろうと試みる。まだまだ勉強が足りない。そう、これは指揮者として活動していく以上、一生続けていくものなのだ。

最近、指揮者を志す若者と話をする機会が多い。彼らの「どうすれば指揮者になれますか」の質問に私はこう答える。それはまず、どうしてもなりたいと強く思うこと。そして、努力すること。アンテナを張り巡らして情報を集めること。著名な指揮者にどんどんアタックして練習を見せてもらうこと（これが一番勉強になる）。面識などなくても、勉強したいという強い意志を、素晴らしい音楽家ほど理解してくれるものだ。そして良い人間関係をたくさんつくること。指揮者は人に認められてなんぼの世界。そして人と人を結びつけることも。つまり、ディレクターであり、コーディネーターなのだ。音楽を学び、指揮の技法を磨くのと同時に、人間を磨くこと。人間性が指揮者の価値を決めるといっても過言ではない。私もまだまだ指揮者としては「ひよっこ」、人間的にも磨かれていない自分を、時折顧みては肝に銘じている次第である。

憧れの小澤征次先生が六十五歳にして、ウィーンのオペラハウスの音楽監督になる。小澤先生自ら「新しいことにどんどん挑戦していきたい」とテレビのインタヴューに答えていらした。素晴らしいことである。夢を追い続ける姿こそ「青春」と言える。私もこれまでに、たくさんの夢を追い求め、少しずつだが実現することができた。今も頭の中は「次の夢」でいっぱいだ。私の青春はまだ始まったばかりである。

恩師探訪

今回は昭和三十九年に赴任され母校に多くの功績を残された池山吉彬先生にご寄稿頂きました。

船高―思い出すことども

池山吉彬先生

不忍池に近い根津の「はん亭」は、下町という風情を持つそのたたずまいのせいか、ひどく込み合っていた。二階の畳の席に腰を落ち着けてまもなくH君とN君が現れた。私が定年退職した昨年の夏、新宿で会食して以来一年ぶりである。ここは、N君のなじみの店だという。根津神社や夏目漱石の旧住居跡などの話をしているところにW君が着いた。串を並べながら、杯を重ねた。

三人とも船橋高校時代の教え子である。特にW君は三年間担任だった。かつて「掃除は学生の本分ではない」と主張して、放課後一時間も私をてこずらせた生徒だったが、今は外語大の助教授である。もう掃除の心配もなくなって、中公新書で「フランス現代史」を出した。学校紛争の世代だから、茫々、二十七年前の卒業である。すでに不惑を越えた彼らの顔を見ていると、人々のざわめきの向こうから、なつかしい歳月が立ち上がってくる。

当時定時制で教鞭をとっていた山崎一穎先生と大学院で席を並べたのが縁で、昭和三十九年九月、私は何もわからぬ新任の教師として、船高の教壇に立った。

はじめて学校の土を踏んだ日、あれは新校舎の第一期工事だったのだろうか、校庭にはところどころ水たまりができて、ぬかるみの中に簀子を差し渡し、その上を通って古い木造の校舎にたどりついた。二階の廊下は歩くとミシミシと鳴り、あちこちに隙間があって今にも抜け落ちそうであった。海岸を埋め立てる前の千葉県は、よほど経済的に逼迫していたのだろうか、教室の窓ガラスが割れていてもなかなか補修されず、冬には冷たい風が歪んだ木の枠から吹き込んできた。それでも生徒は不平ひとつ言わず熱心に授業を聴いていた。そのとき、自分がその学校に十六年も居続けることになろうとは私は夢にも思わなかった。

いま思うと、私が着任したころが丁度船高の興隆期に当たっていた。優秀な生徒が集まり、学力も右肩あがりに上昇していった時期である。夏には高峰高原のJバンドに登り、秋には、夜の御殿荘の板敷きの縁側に、生徒が正座して並んだ時代でもあった。

私は着任した翌年から文芸部の顧問になり、転任するまで続けた。その間、『過程』という薄い機関誌を年一回ずつ文化祭のときにまとめて売っていた。活動しているのかいないのかわからないような部であったが、部長には変り者が多かった。山の好きな部長は山岳小説ばかり書いていて、将来山小屋の主人になると言っていたが、親の跡を継いで建築会社の社長になった。Eという女子の部長は文系の科目にきらきらするような才能があったが、個性が強すぎて日本の学校に合わなかったのか、アメリカへ留学しそのまま向こうの大学に進んだ。留学中、源氏物語の講義を聴き、そこは間違っていると講師に指摘したというエピソードがある。今は法律関係の仕事で、アメリカ人の夫と二人の子供と一緒に写ったクリスマス・カードを毎年送ってくる。

杯を傾けながら、人々のざわめきのかなたから浮かび上がってくるのは、やはりこれらの生徒の顔である。担任を持ち、願問を引き受け、白墨の粉だらけになりながら悪戦苦闘していたのが、私の中の思い出の船高であり、いわば青春であった。私の教師人生の最も良き部分がそこにあり、そこにしかなかった、と言えるかもしれない。

退職のひとつの区切りとして、昨年三月、それまでの二冊の詩集と併せて『林棲期』という詩集を出した。自分史という思いもあって、文芸部の『過程』や船高の新聞に書いた雑文もいくつか収録して本にした。

八十周年へ向けて

80周年記念事業実行委員長
同窓会副会長　小石　税（昭和三十年卒）

会員の皆さんもお聞き及びと思いますが、平成十二年に母校は創立八十周年を迎えます。この記念すべき年を同窓会としてもお祝いし、母校の発展にいくらかでもお役に立てればという趣旨で、八十周年記念事業実行委員会が組織されました。平成十一年度通常総会で事業の概要が承認され、同窓会名簿作成や春の同窓会開催に向け、記念事業がスタートいたしました。

同時に、同窓会としても、改めて皆さんにはお願い申し上げることとなりますが、記念事業を実施するために、皆さんから寄付金を募ることといたしました。

今、母校に学ぶ全日制の生徒も、定時制の生徒も、学業とスポーツに活躍し、県立船橋高校の名前は全国に轟いておりますが、この八十周年を基になお一層活躍していただきたいという気持ちは卒業生の誰もが抱く母校への思いだと思っております。皆さんのお志を頂戴して、是非とも二十一世紀に学ぶ生徒たちに、同窓会として支援して参りましょう。

さて、実は、私は七十周年記念行事でも実行委員長を務め、無事事業が終了した後は、同窓会の仕事を次世代の同窓生にバトンタッチし、会員の一人として、また、副会長として同窓会行事に参加しておりました。実際、三代川会長と事務局長の矢野氏を中心に、若い皆さんの活躍で同窓会活動もますます充実していると安心しておりました。ところが、総会の直前に矢野事務局長が体調を崩され、突然、辞任されることとなってしまいました。内々、矢野氏に今回の八十周年記念事業の実行委員長をお願いする予定であったので、人選にも苦慮せざるを得ませんでした。結局、突然のことであり、人選に手間取ると事業の計画もままならないということで、前回の経験を活かせということで、私にお鉢が回ってきたという次第です。七十周年から十年がたち、特に経済情勢が激変し、同窓会を取り巻く環境も変化しております。前回の経験を活かして、とは思うものの果たしてどの程度お役に立てるかと思うといささか荷が重いと言う気もしますが、会長、校長先生、事務局の皆さんや先生方と力を合わせて事業に取組んで参りますので、会員の皆様にも事情をご理解いただき、ご助力をお願い申し上げます。

同窓会事業報告

船橋高等学校同窓会は、毎年二月十一日に春の同窓会を、八月第一日曜日に通常総会を開催しており、本年も、多数の会員の皆さんにお集り頂きました。会の模様と総会での承認事項をご報告いたします。

昨年ご報告申しましたように、同窓会業務を船高出身の現役教諭を中心とした学校理事から、校外の事務局理事に引き継ぎました。校外事務局は、初年度のこともあり、また仕事等をしながらのボランティアとなるため、困惑と混乱しながらの一年でした。勿論、従来通り在職学校理事の協力を受けながらですが、行き届かぬ点多々あったところ、同窓会長、理事及び小西校長先生他皆様の寛大なお心を持って一年を終えることができました。尚、校外事務局理事はまだまだ手薄なところ、勤務先の異動、家庭の事情等で辞任せざるを得ない方がでております。お近くに住み、母校に少しでも関心のある方、草取り・空き缶拾い・老人ホーム慰問などのボランティア感覚でご協力いただければ幸いです。母校同窓会事務局までご一報ください。

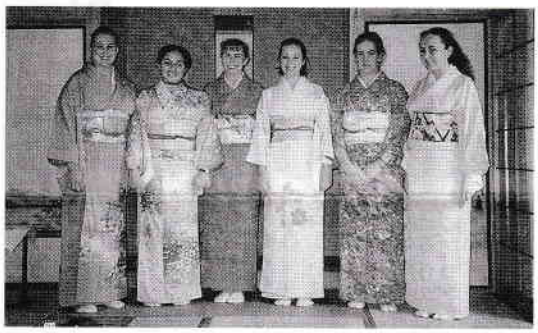
以下、十年度の事業概要を報告いたします。

■「同窓会だより」の全会員向け送付■

平成二年の七十周年記念事業の一環として募った募金のうち学校へ寄付した残金を基金として、同窓会だよりを発刊してまいりました。但し、予算の制約もあり（九年度印刷郵送費三八六、九一四円）、従来は送付対象は寄付者と発行年度の卒業生の概ね二千五百通に限らせていただいておりました。今年度は八十周年を控え、「名簿作成」を同窓会記念事業として決定していることもあり、完成度の高い名簿にするため、原則的に卒業生全員を対象とし二一、一五三通送付しました。従って、今年度の同窓会だより発行経費は、従来の約九倍の三、三二〇、四二七円となりました。会員状況は以下の通りです。（平成十一年六月十六日現在）

一　会員数　二五、三七二名
　　判明者　一七、七〇五名
　　（69・78％）
二　名簿予約状況
　　三、一三二名

同級生はともかく他学年卒業生の名簿なぞ必要ないと考える方もいらっしゃるかと思いますが、同窓会賛助の意味でも、まだお申し込みでない方はご協力いただければ幸いです。


オーストラリア短期留学生

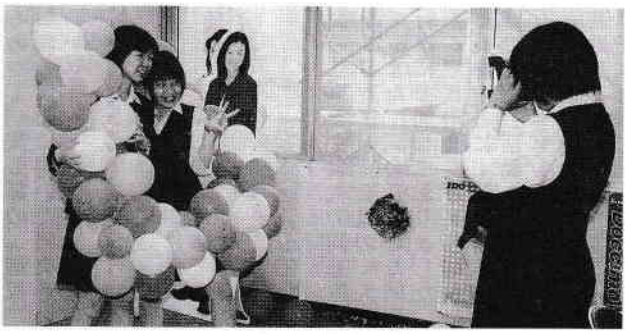
■事業協力金について■

平成十年度は、同窓会だよりに一口千円の「事業協力金」賛助のお願いを同封いたしました。これは記念基金も年々の同窓会だよりの発行で歳々減少していく為、同窓会活動の資金的基盤を確保するための浄財をお願いしたものです。理事会、総会でも議論の分かれたところですが、平成十年度決算報告では、お蔭様で同窓会二、五二二名より二、九六〇、六三〇円のご協力をいただきました。十一年度の八十周年記念事業同窓会活動費として、理事会、総会の総意の基に有効に活用して行きたいと考えております。尚、本来、同窓会だよりは毎年発行し、出来るだけ多くの同窓生に送付する必要があるので、事業協力金も毎年お願いするのが筋ですが、今年度は、八十周年記念事業の一環としての募金もあるので、暫時中止することとなりました。多くの同窓生のご賛助に御礼申し上げるとともに、ご報告申し上げます。

■平成十年度春の同窓会■

「還暦を迎えた同窓生が幹事学年となり、実行する春の同窓会」も昭和二十八年卒花澤実行委員長より始まり、昭和二十九年永嶋実行委員長、昭和三十年白井実行委員長、昭和三十一年鮎川実行委員長と続き、すっかり定着いたしました。今回も昭和三十二年中村実行委員長のもと、三一五名の参加という大人数となったため、昨年に引き続き昭和二十八年卒の林先輩の経営するホテルグリーンタワー幕張で、楽しく旧交を温めることが出来ました。還暦という人生の節目に、短期間でも清冽な青春を過ごした高校時代の旧友・恩師と久闊を分かち、新たなグッドタイムへの良き契機になればと存じます。平成十一年度は昭和三十三年卒松永修己実行委員長のもと、より多くの人生賛歌が拝聴できればと楽しみにしております。後輩の我々世代も、もっともっと若い世代も日ごろ口うるさい？と思いがちな世代の青春を覗きながら、同世代の旧交を温めてはいかがでしょうか。何の利害関係もない同窓会のひとときは、知らずに積もるストレスの解消となること請け合いです。

陸上競技大会


平成十一年たちばな祭

母校の現況

●全日制の部活動の状況●

文章内の番号は以下の大会の種類を表しています。
①関東大会県予選
②全国総体県予選
③その他

バスケットボール男子
①ベスト8
②一回戦敗退

バスケットボール女子
①一回戦敗退
②二回戦敗退

サッカー
①一回戦敗退
②一回戦敗退

テニス男子
①一回戦敗退
②三回戦敗退

テニス女子
①一回戦敗退
②二回戦敗退

バレーボール男子
①ブロック敗退
②二回戦敗退

バレーボール女子
①ブロック敗退
②二回戦敗退

バドミントン男子
①団体戦二回戦敗退　ベスト32
②ダブルス二組出場、シングルス一組出場
③夏季大会団体ブロック三位、新人大会団体ブロック四位

バドミントン女子
③夏季大会団体ブロック二位、ダブルスブロック優勝・準優勝、シングルス三位・四位、新人大会団体ブロック二位

剣道男子
①一回戦敗退
②三回戦敗退

剣道女子
①一回戦敗退
②ブロック敗退

柔道
①一回戦敗退
②ベスト16

ソフトテニス男子
①団体二回戦敗退、個人二ペア一回戦敗退
②一回戦敗退

ソフトテニス女子
①団体二回戦敗退、個人一ペア一回戦敗退

陸上
②男子走り幅跳び県入賞

水球
②準優勝
③全国総体関東予選九位、ジュニアオリンピック関東予選三位、県高校選手権優勝、関東選抜大会九位、神田杯四位、県新人大会五位

競泳男子
③県高校選手権四百メドレーリレー三位、八百リレー四位、百メートル背泳二位、二百メートル平泳ぎ六位、二百メートル個人メドレー六位、総合五位

競泳女子
③県高校選手権二百メートル背泳八位、四百メートル個人メドレー二位、二百メートル個人メドレー七位

野球
③第八十一回全国高等学校選手権大会
一回戦　対市立千葉　五対一
二回戦　対八千代松蔭　一対三
秋季大会県ベスト8

アーチェリー
③関東選抜大会女子二名出場、一年生大会男子個人県四位

書道
③第二十三回全国高等学校総合文化祭千葉県代表：小林加代子

全国高等学校総合文化祭

●定時制の部活動の状況●

六月に行われた定時制・通信制総合体育大会の結果、今年は野球部、男子バスケットボール部の二つの部活動が全国大会に出場することとなった。

バスケット部は今年で二年連続出場となった。八月六日東京体育館で奈良代表天理高校に快勝したが、七日駒沢体育館で神奈川代表湘南高校に惜しくも敗退した。

野球部も同じく二年連続出場となった。十七日神宮球場で静岡中央高等学校に十五対六で一回戦で敗れた。

どちらの部活動も県大会は圧勝に次ぐ圧勝の連続であったが、全国大会ではまさに「上には上・・・」を感じざるをえない暑い暑い夏となった。

定時制全国大会参加

定時制全国大会参加

おたより彼れ是れ

平成十一年春の同窓会返信用葉書で寄せられた会員の「声」です。

原田和裕（昭和四十三年卒）
同窓会だより楽しく、なつかしく拝見させてもらいました。特に学校全景、青柳先生の写真に思わず見入ってしまいました。15年近く千葉には帰っておりませんが、いつか母校に行ってみたいと思っております。

宮城伸吉（昭和三十三年卒）
ご連絡が来てなつかしさで一杯です。私も59才、残り1年で定年です。北総開発鉄道千葉ニュータウン中央駅駅務区長として張り切っています。

川田千恵子（昭和四十一年卒）
昭和43年に野村証券本社に入社して早や30年が経ってしまいました。
このところの証券不祥事で会社のほうもだいぶ厳しくなってまいりましたが、健康に気を付けてこれからも頑張っていきたいと思っております。

箕浦一郎（昭和四十八年卒）
昨年20数年振りにクラス会を開き久し振りのタイムスリップを楽しみました。忙しい世代ですが、こうした余裕大事にしたいですね。

藤原耕二（昭和五十七年卒）
数学の研究のため、アメリカのユタ大学に滞在中です。

石川若枝（昭和六十一年卒）
この11月、立風書房より、翻訳「アリーチェは天使になりました」を出版することができました。難病に冒されながらも明るく生きた女の子の本です。

幸田雅子（昭和三十五年卒）
体育祭を行っていないとの事びっくりしました。残念です。私たちの頃クラス一つになって楽しんだ仮装行列、「高校三年生」の歌のようにフォークダンスをドキドキしたこと等、なつかしい思い出です。

池谷富美子（昭和三十年卒）
今回『千葉県高校演劇五十年史』に市原悦子さん達と一緒に私の手記も載せていただきました。演劇部の顧問だった渡辺隆先生のお陰と感謝して居ります。素晴らしい一生の一ページ心暖まる思いです。皆様のご多幸と船高のご発展を心より願っております。

清遠高明（昭和五十五年卒）
就職して、関西に在住し10数年、同窓会だよりを頂き懐かしく思います。生活の場が大阪な為、東京しては千葉・船高といった情報にはふれる機会が少なく遠い存在に思えてしまいます。しかし、同窓会だよりを拝見するにつれ、心がなごみます。

加藤　孝（旧職員）
定年退職後、はや11年経過しました。
郷里へ帰り、地域の生涯学習のささやかなお手伝いを生き甲斐として働いております。

宮本恭子（昭和五十五年卒）
江川紹子さんが船高の先輩とはびっくり！
現教頭の山本先生には社会を教わりました。江川さんは早大でも先輩です。光栄ですね！

内山利江（昭和三十二年卒）
42年昔の船高時代を遠いこの地でなつかしく思い出しております。
いつの日かそおっと帰ってみたいとなつかしい友の顔が浮かんできました。

保澤　興（昭和二十年卒）
平成9年所用で船橋市を訪れた折、53年振りに母校を訪ねてみました。昭和20年旧中卒業当時の木造の校舎に較べて堂々たる威風を誇る母校の姿に歴史の流れを痛感しました。同窓会名簿で学友1人1人の姿を偲んで居ますが、遠隔の地で出席できないのが残念です。母校の発展をお祈りします。

遠藤倫平（昭和三十年卒）
11月発行同窓会だよりの青柳先生「船高十八年の思い出」を懐かしく拝見いたしました。特に「船高生の気質」は当時が強くよみがえる記事でした。先生の益々の御健勝をお祈りします。

中嶋次子（昭和四十六年卒）
この四月の長男の入学式に久しぶりに母校の校歌を聞けました。自由な校風、盛んな部活、私達の頃よりいいなぁと思います。

小島弘之（平成二年卒）
現在はエクアドルへ海外協力隊として行っています。11年9月頃戻る予定です。

藤田　丞（平成四年卒）
大学院で基礎物理学の研究をしております。来春には博士課程に進学予定です。

楠原絹代（昭和四十九年卒）
同窓会だより第11号になるんですね。以前は送られてきたのでしょうか？
教頭になられた山本先生はおかわりなく二十余年の歳月がうそのようです。あの頃は一番お若かった先生と記憶していますが…ご専門が世界史とは知りませんでした。

富沢盛義（昭和二十六年卒）
運動部活動状況を見て、小生の在校当時ボクシング部に籍をおき、県及び関東大会に出場した経験があります。活動状況がないのでチョットさびしく思いました。同窓会の発展をお祈りします。

須賀美子（昭和二十九年卒）
同窓会だより懐かしく拝見いたしました。私は父と親子二代船高でお世話になりました。20年程前に父は会長をしておりました。現在体調を崩し療養中ですが、元気にしています。機会がありましたら是非会合に出席させていただきたいと思っております。私はボランティアのお手伝いをしております。

高下良子（昭和四十五年卒）
私達同級生は卒業以来毎年12月に忘年会を兼ねてクラス会を開催しております。遠方に嫁いだ為なかなか出席できず残念に思って居りますが、山崎先生を中心に30年近く続くこのクラス会行事をお世話して下さる幹事の方々にいつも感謝しています。クラス会の案内状がクラス会との絆。毎年「きっといつか出席します。又お会いできる日を楽しみにしています。」と返信を書きながら船高時代を思い出しています。すばらしいクラスメート達です。「同窓会だより」ありがとうございました。

冨田紘志（昭和三十六年卒）
「同窓会だより」の内容の充実に嬉しく存じます。編集取材委員各位の御努力に感謝いたします。今回の青柳先生の思い出の記事により船高の伝統を再認識しました。毎年夏の甲子園への野球部の活躍を楽しみ応援にも出掛けています。

榎木鈴江（昭和四十三年卒）
在学中はコーラス部に入っていて、「ベートーベンの第九をドイツ語で歌う」のにあこがれていました。が、今や、長女と共に大阪城ホールでの1万人の第九コンサートに出るのが、年末の行事となりました。今年ももちろん歌いに行きます！

■ 編集後記 ■

前回と同じメンバーで編集を進めてまいりましたが、記念事業関連の仕事もあり、十分な時間が取れませんでした。
前回は会員の方全員に同窓会だよりを送付いたしましたので、多数の方々からお便りを頂戴しましたが、紙面の都合で全てを掲載することができませんでした。ご容赦下さい。
さて、今回も、どうにか校了。皆さまのお便り、楽しみにしております、と同時に、一緒に事務局の仕事をお手伝い下さる方、歓迎します！

（昭和四十八年卒・S）